

北区治水シンポジウム

～伝える記憶 つながる未来～

羽越水害復興50年記念事業

日時：平成29年6月18日（日）
午前10時から午前11時30分まで
会場：新潟市北区文化会館ホール

主催：新潟市北区役所総務課
協力：新潟市北区防災士の会 葛塚中央防災会

はじめに

区長メッセージ

半世紀前の昭和41年、42年にこれまでこの地域で一番大きな災害だったと言っても過言ではない羽越水害・下越水害が発生し、市域の大部分が浸水するという大災害に2年続けて見舞われました。

この大災害を記録と記憶から伝承し、経験していない世代と共有することで安心できる未来へつなげられるよう「羽越水害復興50年記念事業」の一環として「北区治水シンポジウム」を開催しました。

この水害で被災された皆さまからパネリストとして当時の経験をお話いただきました。この経験を私たちはしっかりと受け止めて、これからの地域防災に役立てていかななくてはなりません。

当日ご出席いただいたパネリストやオブザーバーの皆さま、また、当時の貴重な記録や映像などをご提供いただいた皆さまなど本シンポジウム開催にあたり多くの方からご協力をいただきました。関係者並びにご参加いただきました皆さまに感謝申し上げるとともに、これからも災害に強い安心で安全なまちづくりに努めてまいります。

◆ プログラム ◆

・羽越水害の記録映像放映

・パネルディスカッション「水害の記憶の伝承」

コーディネーター 飯野 晋
新潟市北区長

パネリスト 金城 道夫さん
元 葛塚中央防災会会長

高橋 恵美子さん
元 新潟市北区赤十字奉仕団
豊栄地区副分団長

水野 東一さん
元 豊栄町消防団分団長・本部技術部長

オブザーバー 中川 俊一さん
新潟県新潟地域振興局 治水課長

鈴木 良子さん
新潟市北区防災士の会会長

・防災企画展

水害写真パネル展示

防災グッズ展示

飯野北区長開会あいさつ

皆さんおはようございます。北区長の飯野でございます。本日は早朝から、これだけ多くの方にお集まりいただきましてありがとうございます。

また、このシンポジウムの前に避難訓練にご参加いただいた皆さんや、北区防災士の会の皆さんにも大きなご協力をいただきました。



「伝える記憶 つながる未来」というテーマで、50年前、51年前の、これまでこの地域で一番大きな災害だったと言っても過言ではない羽越水害・下越水害について、当時の経験者の方々からお話いただき、それをまた皆さんと共有していきたいと思っております。

50年前というと、当時、もうお生まれの方で記憶のある方も多いと思いますが、私は生まれておりませんでした。

水害後、ニュータウンの開発などで他地域から移り住まれた方達はこの時の被災状況を知りませんし、子ども達や若い人達にも、当時の経験者の方からお話をいただき、みんなで共有して未来につないでいこう、というところが今回の趣旨です。

「津波てんでんこ」という言葉があります。これは岩手県に伝わる言葉で、津波が来たら自分の命は自分で守る。親や子や家族のことは心配だが自分の命を守る行動として一番にするのは、高台に逃げ、一人でも多く助かって生存率を上げるんだ。ということです。

新潟でも、建物の下敷きにならないよう「地震が来たら竹藪に逃げろ」という言い伝えがあります。建物がなく、根が張っていることで地盤がしっかりとしているところからきているのでしょうか。

2004年9月29日に、愛媛県新居浜市では、一日で300mmという50年前の羽越水害に匹敵するような降雨量にみまわれ、土砂災害が発生しました。

しかし、100世帯 500人が住んでいる立川地域は、行政から避難勧告を受ける前から避難準備を進め、誰一人死傷者が出なかったのです。

この地域は昔から土砂災害があるところで、自治会長をはじめ地域住民には「災害時には迅速な事前準備と避難行動を」という教訓が伝えられており、役員が行政からの避難情報が出る前から動き始めて、住民が自主的に避難したのです。



昨年の熊本地震の折、新潟市は被災者の支援に熊本市へ職員を派遣したのですが、問題となったのは「長年災害のない良いところ」とアピールしていた熊本県では、災害に対応する意識があまり強くなかったという事です。

避難所の設営が遅れたこと、住民の方も経験がなく自分で率先して動けなかったこと、救援物資が一ヶ所に集まってしまい物資がスムーズに流れなかったことなどが、今後の教訓としてあげられています。

罹災証明についても、職員にさまざまな業

務が重なり証明書の発行がスムーズに行かず、地域住民の再建活動に遅れが出てしまいました。

このように、熊本県では愛媛県のような教訓がなかったために、災害時の対応が遅れてしまったようなところがありました。

北区では、今日お聞きする50年前、51年前の災害の話を受け止め、豪雨や地震などの災害時には適切に対応し、一人の命も失わないよう取り組んでまいりたいと思います。本日はよろしくお願い致します。

パネルディスカッション

<飯野北区長>

それではよろしくお願い致します。

私から、今日のパネルディスカッションの進め方についてご説明させていただきます。

今、ビデオを見ていただいた通り、昭和41年・42年の下越水害・羽越水害において、下越水害での被害総額は53億円、これはその町の年間所得を上回る損害だったということです。



市街地のごく一部を残して町全体がすっぽりと水没
昭和41年7月19日

避難者数は、延べ11万2千人に上りました。

先ほど葛塚中学校の映像がありましたが、葛塚中学校には最高時約1,400名の方が避難され、平均で10日間に渡る避難所生活をされました。

今まで経験したことのない被災状況の中で、当時起こっていた災害と町を守るための活動、特に水防活動が現場でどの様に行われていたのか、また、避難所に避難された方々への対応や、その後の町の復旧・復興への取組、当時どういうお気持ちで活動されていたのかを、パネリストの金城さん、高橋さん、水野さんから実際の経験をもとにお話していただきます。



それからオブザーバーとして今日は新潟県から中川治水課長にご参加いただいています。中川課長からは北区における治水の現状についてお話しいただきます。

そして、北区防災士の会の鈴木会長。この会は今年の3月、新潟市において最初に発足いたしました。

会員である防災士の方々は、防災に対する熱意と知識・技能を持ち、行政と地域をつなぐ活動をされています。

平時には地域で防災活動を行い、緊急時・災害時には、避難所など色々なところで災害対応に携わっていただいている会ですので、鈴木会長からは、地域の防災活動のあり方についてのお話をいただきたいと思います。

皆さん方に一通りお話しいただいた後に、フロアーの方からご質問や「私もこういう経験をしているんだ」というお話しをいただけたらと。そういう進め方をしていきたいと思っています。

それでは、各パネリストの皆さん方から「伝えていきたい私の経験」についてご報告いただきます。

はじめに、金城道夫さんから、当時土砂災害や復旧活動を経験されているということで、お話をいただきます。よろしくお願い致します。

<金城道夫氏>

今ほどの映写は7・17、それから8・28、昭和41年・42年と2年連続の水害時のものだと思います。下越水害の発生した昭和41年7月17日は、ちょうど今頃のような気候でした。



当時私は、福島潟の上流にある折居川のずっと山手の方、新潟市の隣に位置する阿賀野市、旧笹神村の大通りにある笹神村役場のすぐ隣で、電球製作所の工場を営っていました。

私は31歳で事業を始め、40人位の従業員がいる工場は町役場のすぐ隣の高台だったので被害は少なかったのですが、朝5時半に起きましたら、工場前のバスが通るメインストリートは70~80cmから1m位の深さの濁流になっていて、そこに直径が30cmもある電信柱のような流木がグイグイと流れていました。

いやーもうすごい、びっくりしました。腰が抜けるっていうか、玄関の方へ行ってみましたらビタビタビタビタと水がもう玄関の敷居のところまで来ていたので、いやこれは大

変なことになったと思い、家族みんなを起こしました。

事業を始めたばかりで借金がたくさんあったこともあり、気が動転していたと思います。とりあえず長靴をはいて出ようとしたら、もう長靴がドブッと埋まってしまいました。膝上まで水が来ていて、こうなんて言ったらいいか、津波のようにガーッと流れていくんです。

水が流木と一緒にメインストリートの高いところから低いところへガーッと流れていくのを見て本当にびっくりしました。

うちはたまたま直進のところだったのでそんなに被害はなかったのですが、道のカーブのところに建っている家を後から見に行きましたら、流木が流れていくときに、コンクリートブロックでもなんでもみんな壊してしていました。場所によっては、家の中に丸太ん棒のでっかいの入ってきていて、三寸角か四寸角、まあ五寸角かどうかはわかりませんが、もう土台柱なんていっぺんに抜けてしまっていましたね。いやすごかったです。



白波を立てて押し寄せる加治川の水が、福島潟沿いの集落を襲う
(新潟市北区新鼻甲地内)

笹神村は上流だったので水が引くのも早かったですね。5時半頃は水が出ていたのですが、7時頃になりましたら水はもう引いていました。

水が引いたあとは泥です。泥と、もう一番

大変だったのは、今では想像できませんが、当時は水洗便所なんてありません。皆さんご承知のように、汲み取りのトイレだったので、糞尿が水に浮いて流れ出し、泥に混ざるわけです。7月17日は夏の暑い時期だから、とにかく匂いがすごかったですね。

土砂や流木を含んだ濁流が流れ込み、水が引いた後には、大きな木や石、汚泥などの残物が残りました。

復旧作業や後片付けは、最終的には機動力が必要になります。人間の力というのは知れたもので、当時は今と違って機動力がありません。

自動車もそんなたくさんありませんでしたし、ドライバーの着る白いつなぎ服を着ているだけで羨望の眼差しで見られるくらいドライバーが少ない時代でした。

私には土建屋の友だちがおりまして、その人からドライバーがいなくてということで車の運転を頼まれました。うちも事業がありましたが8時になっても従業員が誰も来ない。40人近くいる従業員が誰も来ません。非常事態ですから来るわけがないです。

私は、ドライバーとして復旧作業に朝から出ました。夕方帰ると頭のとっぺんから足のつま先まで泥だらけになっています。それが4～5日続きました。

いずれにしてもすごい災害だったということと、今みたいな機動力がなかったということです。全部人間が動いて手作業で担ぐとか、あるいは丸太を使ってテコの原理で大きな石や流木を動かすとか、人力で作業していました。

働いていて、疲れたとか難儀だとか誰も言わなかったです。そういうときのお互いの「住民の力」っていうのでしょうか、それは素晴らしかったなと思いました。



土のうが積まれた新井郷川の左岸。あふれた水を食い止める。(昭和41(1966)年7月 新潟市北区新崎3丁目) 伊藤昇氏 撮影

<飯野北区長>

どうもありがとうございました。

まだまだお話を伺いたいのですが、また後程、掘り下げて伺いたいと思います。

それでは、次に高橋恵美子さんから、木崎小学校で避難所運営に携わっていたお話しをお願いします。

<高橋恵美子氏>

昭和41年・42年の水害の時、私は豊栄町役場木崎出張所の職員でございました。



18日の早朝、木崎地区に避難命令が出ました。木崎小学校の体育館は新築したばかりで竣工式も行っていなかったのですが、そこへ避難命令が出たわけです。

私は木崎出張所の職員として、避難所のお世話をすることになりました。その時は、誰がやるとか行けとか言われた覚えはありません。けれど避難所のお世話をするのは当然私たち出張所の職員だと思い、泊まり込みで小学校に避難された方達のお世話をずっとしていました。

最初に浮かんだのは、避難された方達が安心して寝ることができる場所、それから食べ物を提供しなければならないという事でした。



役場正面玄関が船着場に早変わり。おにぎりやパン、医薬品もすべてが船で運搬された。(新潟市北区葛塚 現在の北区役所)

そこで、下大谷内にできたばかりだった中央競馬会の競馬場へ行き、炊き出しをお願いしたところ、快く引き受けていただき大変助かりました。

当時、木崎小学校の後ろの土地は、団地などはできておらず、避難されてきた方達の畑でした。ちょうど収穫時期でしたのでその野菜をいただき、一緒におかず作りをしました。

昨日、当時中学生だったという方から、毎日ナス漬けとナスの油炒めを食べさせられていた記憶があると聞きました。7月の17日・18日頃はナスの最盛期だったと思います。

当時、木崎周辺で収穫した野菜は、旧新潟市までリヤカーで売りに行き収入源にしていたのですが、国道は7号線も全部浸水し、売りに行くことはできません。なので、どこの畑からでもいいから成ってるものは皆もらってきてくれと。

当時中学生だった男の方は、私から「どこの畑からでもいいすけ野菜持ってこい」と言われて、リヤカーを引っ張って行ったことが忘れられないと言っていました。

避難された方達からの協力が沢山ありました。ナス漬けの上手な人は大きな樽を持ってきて、そこで毎日ナスを漬けてくれました。

又、料理のできる人は全員が調理作業をしてくれて、本当にありがたかったと思います。

万一の災害に対応しなければならなかった時、一番感じたのは、避難された方達からの協力でした。私は木崎が村役場だった時からの職員だったので、皆さんのお顔をよく存じ上げていたというのがよかったのではと、今でも思っています。

<飯野北区長>

どうもありがとうございました。

続きまして水野東一さんです。当時消防団に入られていて水防活動をされていたということです。

では、その時の経験をお話したいかと思います。お願いします。

<水野東一氏>

私の住んでいるところは旧長浦村というところで、福島潟や河川からは少し離れているのですが、これまでに3回、水害の水防活動に出動しました。



約1千人の消防団員、地元住民らが動員されて必死に破堤箇所を締切が行われた。(太田川 新発田市 佐々木地内)

昭和41年・42年の水害以前、昭和33年にも水害がありました。その時は、一軒から一人ずつ男が行くように言われ、私の家は男手なかったんで、中学を出たばかりの私が引っ張り出され、トラックの荷台に乗せられて、夜の雨の中、行先も聞かされないまま現場に連れていかれました。

着いたところは今の内沼沖でした。そこでは、土手の上に4～5段の土たわらが積まれており、いわゆる土のうですね。今では砂袋ですけれども。その土のうの高さにびっくりしたものです。

いつも見る福島潟の水は土手の下の方にあるのに、その時は土手の上4～5段の俵の上すれすれの高さにまで水が走っていました。そして、その水の上を田んぼに植えられていた稲がそっくり土ごと抜けて流れていくのです。「すごいなあ。田畑が流されるって本当にあるんだ」と思いました。

そして、これからの生活はいったいどうなるのだろう。という不安がどんどん強くなりました。



船で脱出する女性。屋根までの高さで浸水の深さがうかがえる。(新潟市北区前新田沖地内)

その後、向かいの笹神村の方に行くと、水没して屋根だけ出ている状態の家があり、その家族はどうしているのだろう、家族と一緒に生活していた家畜の豚や鶏はどうなったのだろうと心配になりました。後で聞いたところ、豚でもなんでもみんな浮いて流れていたそうです。これは大変な事態が起こっているのだなと感じたことを覚えています。

そして41年、この時も夜にトラックに乗せられて出動しました。福島潟の新鼻甲に到着するとすぐに「こっちに来い。こっちに来い。」と言われ土のうを担ぎ、休みなく朝まで現場で土のう作りと土のう積みの作業していました。「こっちがあぶねえぞ」「あっち

があぶねえぞ」と声があがると、そっちに土のうを担いでいくわけです。



山を切りくずして土のうをつくる。(新潟市北区木崎地内)

体力的というか精神的にも疲れ切っていました。先ほどの金城さんは全然疲れなかったと言っていました。私はすごく疲れました。「砂がなくなればもう朝だな、交代の時間が早く来ないかな」と待ち遠しかったものです。朝の7時ごろに「代わりが来たから交代するぞ」という指令が来て、「やっと解放されるか」という思いで家に帰りました。

帰って来て、手足を洗って家に入った途端、有線放送で「ただいま新鼻甲の一部が決壊しました」という放送が入りました。もたもたしていたら一緒に流されていたんじゃないのかと、その時従事していた人には気の毒ですけれど胸をなでおろしたというか、もう本当に命からがら帰ってきたんだという感じでした。



家に帰ってからは、米とか大事なものを水から守らなくてはならないので、すぐに高いところに移しました。幸い米は濡れなかった

ので1年食べられましたが畑の野菜はみんな泥に埋まってしまいました。

水が来ると家から外へは出られない状態で、どこの国でしょうかね、外国で水上生活をすることがありますけど、あれと同じで縁側から先が見渡す限り水面です。これがいつになったら水が引くのかと途方に暮れた思いでした。



一面の湖となってしまった福島潟周辺(新潟市北区福島潟周辺)



新崎駅の南側に広がっていた水田(現 すみれ野)は濁水に沈んだ。(昭和41(1966)年7月 新潟市北区新崎駅付近)伊藤昇氏撮影

現在は、岡方地区の阿賀野川沿いの胡桃山に建設省管轄の排水場があります。当時、排水機場はなく、水害で加治川からの水が阿賀野川堤防まで溜まり、豊栄町一帯の水が動かなくなってしまいました。



新発田川決壊箇所の仮復旧作業。(新潟市北区浦ノ入地内)

阿賀野川の堤防を切り開いてなんとか排水してもらえないかと、県と町の偉い人が金沢までお願いに行き、24日にやっと土手を機械で切り開いて水を出すことができたのです。

その水が出ていく様子はすごかったです。みるみるうちに水位が下がっていくのです。もっと早く切ってもらえればよかったのに、と思いました。

<飯野北区長>

どうもありがとうございました。

時間の都合上、最後にまとめのところでもう少し掘り下げてお話を伺いたと思います。

それではここで、フロアーの方から、今の3人の方々のお話を聞いて、「もっとこういうのもあったよ」とか質問でもいいですので、おひとりおふたりから発言をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。「私もこんな経験したよ」とか、マイクをお持ちしますので。できれば自治会名とお名前をいただけたらと思います。

<フロアー、玉木氏>

玉木と申します。私は当時、高橋さんのように豊栄町役場の厚生課救済物資係にいました。

一番助かったのは、水害の為に豊栄駅で止まってしまい新潟に行けなくなった貨車があり、その積荷にあった野菜を全部放出してくださったことです。本当にありがたかったです。そして、避難している方達の人数等を確認しながらその野菜を各避難所へ分ける段取りをしました。

私は当時、鳥屋というところにおりまして、私の家も水が床上3cm位上がりました。

一番困ったのは、トイレが使えなくなったことです。中学校も1階のトイレが全部使えなくなりました。

水没して町全体が一面の湖でしたから、自衛隊は25人乗りの船で、さまざまな救護活動をやっていました。船は国鉄の線路の上を通り、現在の旧7号線新崎信号のところまで、一日に2便くらい往復していました。



新崎に町対策本部連絡所ができ、ここから町の中心部まで、自衛隊の定期船が運航された。(新潟県北區新崎地内)

私も役所に勤めているからには避難されている方達のためになんでもやらなくてはと思っていましたので、家のことは忘れて復旧活動にあたりました。



<飯野北區長>

どうもありがとうございました。

当時行政の立場で様々な経験をされた様子をお話いただきました。国鉄は現在JRですが、貨物車から野菜を救援物資としてうけた。行政と民間の連携も大事になるということですね。

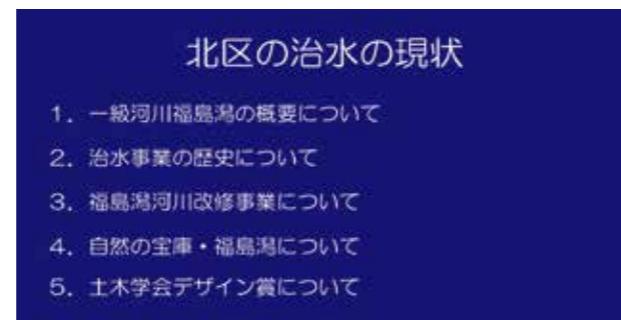
続きまして、オブザーバーからお話をいただきます。

福島潟については治水事業が進んでいる最中ですが、北区における治水の現状について、新潟県の中川治水課長からお話をお聞きします。よろしくお祈りします。

<中川俊一治水課長>

新潟地域振興局地域整備部治水課長の中川です。北区の治水の現状について、今ほどの水害の話等も含めてご説明します。

今日用意してきた項目は5つあります。福島潟のことやデザイン賞のお話もさせていただきます。

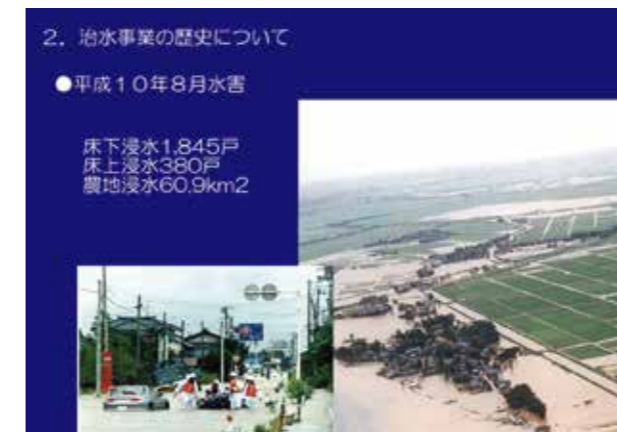


ご存知の方も多いと思いますが、北区の治水といいますと、新井郷川と福島潟が中心になります。



福島潟周辺は非常に低い土地になっているため水が溜まりやすくなっています。福島潟には中小の河川、農業用排水路等が何本も流れ込んでおり、水は福島潟を通過して新井郷川を經由し海へ出ていきます。度重なる集中豪

雨などによる災害を受け、現在は新井郷川のほかに、人工的に福島潟放水路を掘って、福島潟が増水した時には潟の水を直接海に流しています。



昭和41年の下越水害と昭和42年の羽越水害の災害を契機に、新井郷川恒久的治水対策事業が始まりました。福島潟放水路、それから新発田川放水路、こちらは新発田川の上流の水も海へ抜くといった事業も進めました。

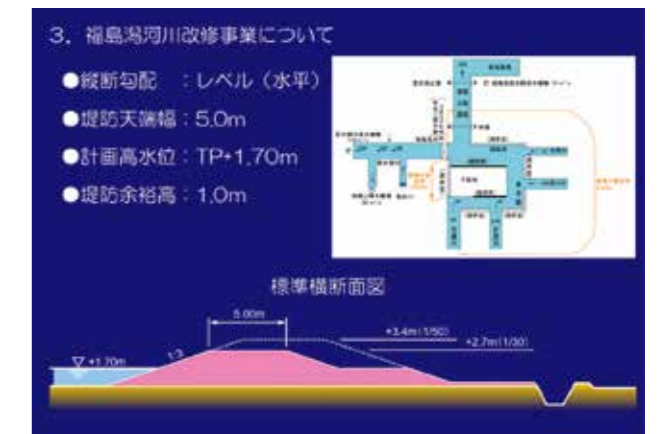
平成10年8月の水害では、福島潟周辺において、床下浸水が1,845戸、床上浸水が380戸、農地浸水60.9km²といった甚大な被害が出ました。

この災害を受け、福島潟放水路等の整備事業の取組みがさらに進みました。折居川・荒川川災害復旧助成事業と合わせ、福島潟放水路で言うと平成15年には災害関係の事業が完了して通水しましたので、福島潟本体の改修という大きな規模の事業に着手しているところです。



福島潟の河川改修事業ですが、湖岸堤といまして福島潟をぐるりと囲むように堤防をかさ上げする工事を行っています。治水安全度は30分の1と言って、これは30年に1回の雨に耐えられるくらいのもので施工しています。

福島潟の水面は、その30分の1の雨の規模になるとプラス1.7mという水位まで水が来るだろうということで、それに対して余裕をもって1.0mさらにプラスして2.7mの高さで湖岸堤の整備を進めています。



さらにその上の計画では、50年に1回の雨に対応するという計画も持っておりますが、現在の工事についてはこの高さで施工しております。

福島潟の半分ほどには越流堤があり、相当規模の雨が来たときだけ田んぼに水を入れることになっています。



堤防の計画については、ほぼ8割方施工が終っている状況です。それから潟内の掘削を

一部行っています。

水門については最終的な設計をしている段階で橋等については完成しています。又、沈砂池については現在も工事中です。

以上、ざっと福島潟の工事の話をしていただきました。次に、福島潟は環境的に保護地区であることと、白鳥の飛来地であるということを紹介させていただきます。

福島潟は、163haが国の指定鳥獣保護区に指定され、日本の重要湿地500、21世紀に残したい日本の自然百選、にいがたの景勝百選に選ばれています。



最後に、福島潟における前年度の改修事業が、土木学会デザイン賞をいただきました。

非常に自然と調和したい改修事業だとお褒めの言葉をいただきまして、表彰状がビュー福島潟の1階に展示されておりますので、機会がありましたらご覧いただければと思います。



<飯野北区長>

どうもありがとうございました。

北区の治水の取り組みについて、まだ進行中のところもありますが、現場で頑張っていることと、着実に進んでいることがよくわかりました。

続いて、北区防災士の会の鈴木良子さんから、発足したてではありますが、防災の新しい取り組み体制の大きな核になる防災士の取り組みについてお話をいただきたいと思っております。お願いします。

<鈴木良子会長>

現在、北区防災士の会は13名の防災士が会員となっております。防災士の役割ということですが、地域の皆さん方のご理解とご協力をいただきながら、地域の防火、防災や減災の啓発活動に努め、北区の地域防災力を高める活動のお手伝いをさせていただいております。

私の居住する南浜地区では、平成25年に社会福祉協議会のご協力をいただき、防災マップ作成事業を行いました。10月に1自治会、11月に1自治会、12月に26自治会で作成し南浜の全28自治会で実施いたしました。

地域の様子について、頭では自宅で一人暮らしの人だと分かっていると思いますが、それをマップにしてみると感じ方が全然違ってきます。



太郎代地区のマップ作りについては、自治会長さん、自治会の役員の方、民生委員さん、青年団、老人会等の皆さん方から参加をいただき協力して作成しました。



毎年実施している自主防災組織の訓練では、南浜中学校の生徒から3年前より炊き出し班として参加してもらい、アルファ化米を使わずにお米の炊き出しを行っています。この訓練では、災害時は目盛りのついたお釜が必ずしもあるわけではないので、そんな時には自分の手で水を計らなくてはならないという事を伝えています。



炊き出しのカレー作りは、50名くらいの中学生の参加があり、私たち地域の大きな励

みになっています。



「南浜地区コミュニティ協議会健康福祉大学」の活動では、防災にはふたつの防災があることを学びました。



一つめは、地域の防災訓練への参加や家庭の備え、自助の対策、家具の転倒防止、備蓄食料品を3日分蓄えるなどの目的防災があります。AEDも目的防災のひとつです。

二つめは、地域のイベントに参加したり、コミ協の講座や公民館の講座行事に参加することなどで、これを結果防災と言います。

防災・減災への取り組みは、災害時の行動だと思ってしまうと継続することが難しいのですが、日常生活の延長線には結果防災に役立つような活動があるということがわかりました。

地域の行事に参加することは、仲間づくりになり横のつながりが強くなります。いざ災害、という時には横のつながりがすぐ地域の防災力になり助け合いができます。

地域の運動会やお祭りなども仲間づくりのいい機会ですので積極的に参加をしていただ

き、防災に強い地域づくりをしていただきたいと思います。



<飯野北区長>

ありがとうございました。

自助、公助の連携や、地域と行政などいろいろな関係機関と連携しながら地域の減災、防災力を向上させていこうということですね。

これからそういった地域の取り組みを、防災活動への強い意欲や多くの知識、技能をお持ちの防災士の方々からどんどん引っ張って行っていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

では、パネリストの皆さん方から最後にまとめということで、おひとり様2～3分位でお話ししていただきます。

金城さんからは、コミュニティ力というのはどう変わって来たのかというところを、高橋さんからは、避難所でのお子さん達の様子はどうだったかといったところを、それから水野さんからは、これからの消防団の活動に向けてのいろいろなメッセージをいただければと思います。

では金城さんからお願いします。

<金城道夫氏>

私は、災害後約1か月間、笹神村役場の車を運転してボランティアをやっていました。当時、ボランティアという言葉はほとんど使われていませんでした。



聞くところによりますと、この日本でボランティアが認知されたのは、阪神淡路大震災の後からだということです。6年前の東日本の災害時には、全国からボランティアの人たちが現場で収拾できないくらい手伝いに来たそうです。助け合い、支え合いの意識が非常に高いというのは、いい世の中になったということではないでしょうか。

51年前の昭和41年。31歳だった私は、休みもとらず借金を必死で返済していた時期だったので、普通に考えればやらなかったと思うボランティア活動を1ヶ月間やりました。その時に、なにかこう、ものすごい達成感があったのです。

現在、私が住んでいる所の自治会にはクリーン新潟推進員という、草色のベストを着てゴミステーション管理のボランティアをやっている人達があります。

ひとりの方が、ボランティア活動でゴミステーションの管理をやっていると、付近に草が生えているのに気が付いて誰かに言われなくても草刈りをしてしまうんだと言っていました。きれいにしていると近所の人から、「大したもんだね」と、お礼の言葉をいただいて、もう最高なんだと。

お金の問題ではないんです。その話をしてくれた人は、去年か一昨年、私から話を持ちかけてボランティアに参加してもらった人なのですが、本人は以前、人前でボランティアとかは絶対やらない、俺はそんな役なんか一

切しないと書いていた人だったのです。

人間って本当に変わるものだなと思います。こういったボランティア活動は、お金よりも何よりも経験することが何よりも大切だと思いました。

人と人とのつながりが希薄になってきているので、災害の時には、先ほどの話にあったように畑からもってきたナスとかキュウリを分け合って食べる、といった助け合いが非常に大事になってくると思います。

これからも、助け合えるコミュニティづくりをもっと理解し、信念をもって推進していきたいと思いました。

<飯野北区長>

ありがとうございました。

次に高橋さん、お願いします。

<高橋恵美子氏>

避難所での様子ですが、非常に大勢の子供達が避難してきていました。家族構成は、まだまだ3人4人と兄弟姉妹がいる時代だったので、旅行に行ったような気分で、みんなで一緒に体育館で寝泊まりできると、子供達はとても喜んでいました。

大人達は、お金がない、お米も収穫できないと、悲惨な思いをされて避難してきておりましたが、子供達はみんな非常に明るく振舞っていたというのが私の記憶です。

避難所の運営では、避難してこられた集落の自治会長さんとの打ち合わせを密にしていたのですが、なによりよかったのは、皆さんから多くのご協力をいただけたことだったと思います。

翌年42年の水害の時のことですが、私は集落の婦人会で湯野浜温泉に行っていました。

朝、水害が発生したということを知り、一緒にいた方の中には前年の水害で床上浸水さ

れた方もいたので、「どうしようどうしよう、年寄りと子供を置いてきたのにこんなところにいられない」と、前年の水害の恐怖心が思いおこされました。



またもや水にとざされてしまった早通小学校
(新潟市北区早通 現在の早通コミュニティセンター付近)

この後すぐ5台位タクシーを呼んでもらい、豊栄へ行ってほしいと頼んだのですが、村上で止められました。「この先タクシーは行けないから、ここで降りてくれ」ということで、村上の公民館で2泊ほどお世話になりました。

羽越水害は、前の年ほど早く水が来なかったように記憶しています。

私は、皆さんの協力があったからこそ災害をその都度乗り切ったのだ、と思っておりましたので、退職後は今までお世話になったお返しに、少しでも皆さんのお役に立てればと、日赤奉仕団の団員として入れていただきました。

ここにパネリストの方々の役職が明記されていますが、私のこの役職についてお話しさせていただき私の経験したお話を終わらせていただきます。



<飯野北区長>

ありがとうございました。
それでは水野さん、お願いします。

<水野東一氏>

この水害で感じたことは、大勢の方々のボランティア精神と絆。大勢の人達の支援が非常にありがたかったなという思いが強く残っています。



南側からの水で水没した白新線のガード下。土のうをキッソブネで運ぶ。
(昭和41(1966)年7月 新潟市北区新崎1丁目) 伊藤 昇 氏 撮影

災害時すぐに支援に入ってくれた自衛隊の方々が、水が引くまでずっと私達の生活を守ってくれました。

また、水が引いた後、これからの生活がどうなるのかと不安をかかえていた時、国や県などからの支援金や救済措置、生活の支援をいただき、とてもありがたく感じたものです。

田畑が流されて何にもできない状態で収入がない人には、復旧にかかわる土木工事なども斡旋していただきました。



今では核家族が増え、地域や家族で共同作業をするということが少なくなっています。

災害が起こった時、まず、自分の地域は自分たちで守らなければなりません。消防団などの地域防災活動ができる組織や人は地域の財産になっていると感じています。

<飯野北区長>

ありがとうございました。
いろいろな教訓から、これからの世代にもメッセージをいただけたかと思えます。どうもありがとうございました。



それでは最後に、総括ということで、お話をさせていただきます。

今日はいろいろなお話を伺いましたが、今の時代にあてはめてみても十分活用できることであり、今後それをきちんと踏襲していかなければ、というようなポイントが数多くありました。

まずコミュニティという話がありましたが、地域のつながりというのは、当時は生活自体がそれぞれ支え合わなければ成り立たなかった。そこにもうすでにつながりというか支え合いがあったわけですが、世の中非常に便利になって自分の家だけで何でもできるようになってきた。ただ、一方で高齢者の一人暮らしが増えたり、あるいは核家族化や共働きで子供をどう育てるのかなど、地域でどう生活していくのか、今までとは全く違った面でのつながりというのが大事になってくると思います。



そしてそのつながりが、いざという時の防災に役立つであろうと。顔の見える関係であれば、避難所に移ったとしても、すぐにそこから生活が立ち上がっていくのではないかと、今後は新しい地域のつながりをより一層強く作っていかなくてはと思いました。

それから避難所では、先ほど高橋さんから、それぞれの方が主体的に頑張ってくれて助かったというお話がありましたが、災害時には、支援を受けるだけではなく、自分のできる事をその持ち場でやっていくんだ、という気持ちも大事なんだと。

自分主体でやっていくことが大切なんだと知っていただき、いざという時には、そのように各自で動いていただければと思います。

また、今日は非常に貴重なご意見をいただきましたので、これをしっかり伝えていきたいですし、シンポジウムに参加していただいた皆さんにも分かっていたわけではないでしょうか。

ぜひそれぞれのコミュニティで、あるいは自治会で、そして家族で、今日のお話をしていただき、この教訓を生かしてほしいと思います。

そして、行政の動きが悪いというお話もありました。緊急時には、まずは地域の方々の生命、財産、暮らしを守るために、今後は行政も素早く動くということを心がけていきたいと思っています。

本当に貴重なご意見をありがとうございました。

合併して新潟市北区となって10年となりました。現在、区の取組みとしてこれまでの10年を振り返りながら、先を見据えていくという「100人インタビュー」という企画を進めております。これから、街づくりですとかいろいろな方の知見、あるいは経験など、皆さんから貴重なお話を伺わせていただく予定になっております。

その中で今回のように色々な経験をお聞かせいただきたいですし、我々はしっかりとそれを残して、これからは役立てていきます。ぜひよろしく願いいたします。

それでは、本日のシンポジウムは、これをもって終了となります。

ご協力、ご参加ありがとうございました。出演いただきましたパネリストの皆さんとオブザーバーの皆さんに、大きな拍手をお願いいたします。

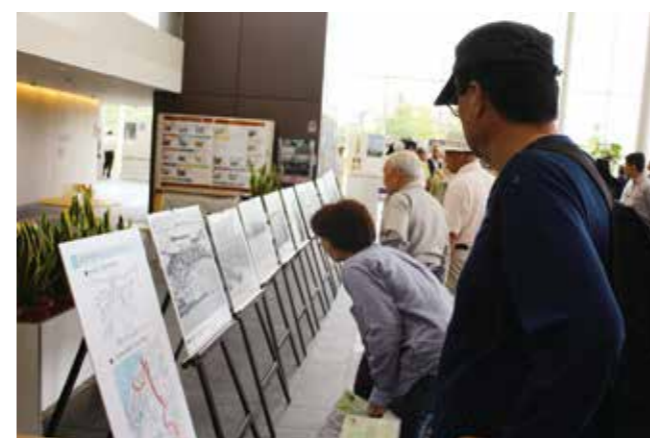


本日のプログラムは終了しました。
ご参加いただきありがとうございました。

羽越水害の記録映像放映



防災企画展 (水害写真パネル展示・防災グッズ展示)



巡回パネル展



- ・北区郷土博物館：平成29年5月27日(土)～7月1日(土)
- ・北区濁川連絡所：平成29年7月3日(月)～7月10日(月)



同時開催：新潟市北区郷土博物館企画展「北区の水害」

平成29年5月27日(土)～7月1日(土)



- ・水害の記録写真や行政文書のほか、梁取幹雄氏主宰の図画教室の子どもたちと地域の人たちが共同制作した「水難絵図」五部作などから、災害を多角的に紹介しました。



歴史的大水害から半世紀

下越水害の記録

(S41.7.17水害) ※旧 豊栄町の記録、松浜・濁川地区の記録より

下越水害の概要

昭和41年7月17日、新潟県北部にかかる梅雨前線上を次々と通る低気圧の影響により下越地方を中心に豪雨となり、二王子岳で543mmを記録するなど、加治川を中心に下越地方の中小河川が氾濫し大きな被害が発生しました。

北区周辺では加治川、新発田川、新新発田川、太田川、福島潟、新井郷川などで堤防が決壊・溢水し、豊栄町は地盤の高い市街地・集落の一部を残して広域的な浸水被害が発生しました。1億トンを超える膨大な水は阿賀野川堤防と砂丘地帯にはばまれ停滞したため、阿賀野川堤防を切り開くという異例の措置が行われ、7月24日に胡桃山地内の堤防が切り開かれ阿賀野川に排水されました。この水害により42ヶ所の避難所に延べ11万2千人が避難し、負傷者67人、総額53億円の被害が発生しました。(避難者、負傷者、被害総額は豊栄町の記録)

松浜・濁川地区は、浸水により2ヶ所の避難所に424人が避難し、2億円の被害が発生しました。(新潟市の記録)

各地の雨量

観測場所	総雨量
新 潟	270mm
二王子岳	543mm
赤 谷	480mm
豊 栄 町	281mm

7.17水害の日誌

7月17日

午前 2時ころ 太田川の天神川取付地附近(佐々木地内)堤防決壊
午前 6時 豊栄町災害対策本部設置
午後 7時40分 加治川左岸バイパスの下流附近堤防決壊
午後 8時10分 新井郷川瀧口橋附近で溢水がはじまり、新鼻甲の老人、こどもは、葛塚中学校へ避難開始
午後11時30分 大雨洪水警報発令
午後11時40分 太田川の佐々木側(右岸)堤防決壊

7月18日

午前 2時 太田川、万十郎川の堤防溢水
村新田、椋、栄町方面に避難命令
午前 4時20分 新新発田川が堤防決壊
笠柳、鳥屋方面に避難命令
午前 7時40分 新新発田川の掘割、前潟の2ヶ所の堤防が決壊
木崎、内島見方面に避難命令
午前 8時 豊栄町に災害救助法適用
福島潟の堤防は新鼻甲地内で決壊
市街地全域が水没の様相となり、2階等へ避難するよう広報

7月19日

午前 零時20分 新井郷川の堤防決壊
午前 1時 5分 兄弟堀、高森新田に避難命令
午後 3時15分 大瀬柳に避難命令

7月20日

新潟県災害対策会議連絡班が、豊栄町役場内に設置される
阿賀野川堤防の切り開きを要請する
加治川、太田川、新新発田川の各堤防決壊か所の仮締切り作業が開始

7月22日

午後 4時すぎ 加治川右岸向中条地内の堤防決壊か所の仮締め切り

7月23日

午前 零時 阿賀野川堤防の切り開きを実施することが決定
太田川、天神川合流点附近の堤防決壊か所の仮締め切り

7月24日

午前 5時10分 阿賀野川堤防が切り開かれ、減水速度増す

7月25日

市街地の水の引いたか所から、し尿、ごみの処理を開始
新新発田川堤防の決壊か所の締め切り

7月26日

災害対策本部で宅地排水班が組織され、白新町、栄町等を中心に、住宅地の排水を実施する
白新線は、この日午後全線復旧する

7月30日

住宅地の排水完了

8月22日

避難所閉鎖



7月19日 市街地のごく一部分を残して町全体がすっぽりと水没



役場正面玄関が船着場に早変わりした

おにぎりもパンも、医薬品もすべてが船で運搬された



さながらアパートと化した葛塚中学校避難所、最高時には約1,400人がここに避難した

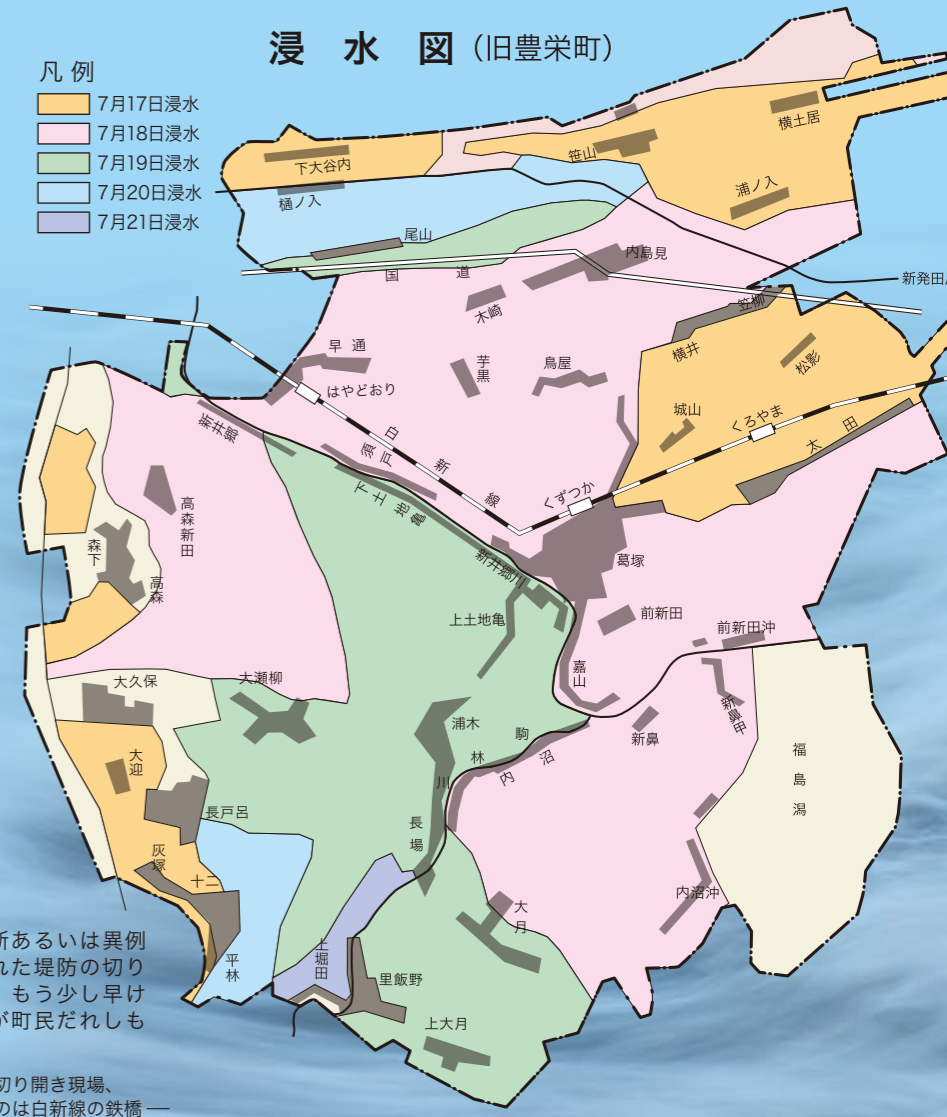


全県の保健所を動員した全世帯の検病調査 — 下町 —



建設大臣の英断あるいは異例の措置といわれた堤防の切り開きだったが、もう少し早ければというのが町民だれしもの感懐だった

— 阿賀野川堤防切り開き現場、右上方に見えるのは白新線の鉄橋 —



新崎に町対策本部連絡所ができ、ここから町の中心部まで、自衛隊の定期船が運航された



7月18日午前8時 白波を立てて押し寄せる加治川からの水が、福島潟沿いの集落を襲う — 新鼻甲 —

豊栄町の被害状況

被害総額 53億4,495万5千円

人的被害 67人
重傷 2人
軽傷 65人

建物被害 15億1,828万円

住家
全壊 40棟 219人
半壊 463棟 1,998人
床上浸水 1,810棟 9,382人
床下浸水 1,410棟 7,580人
非住家
公共建物 130棟
その他の建物 7,874棟

商工業被害・土木施設被害など 6億8,021万3千円

農業被害 31億4,646万2千円

農地 15% 1,200万円
田流埋 4,000% 5,000万円
田冠水 2% 16万円
畑流埋 400% 800万円
畑冠水 2% 20万円
山林原野
農業用施設 170ヶ所 7億6,779万円
農業用施設
農産物等被害 22億9,821万6千円
農産物 509万6千円
畜産物 500万円
水産物

松浜・濁川地区の被害状況

【床上浸水】 141世帯 681人
【床下浸水】 191世帯 934人

歴史的大水害から半世紀

羽越水害の記録

(S42.8.28水害) ※旧 豊栄町の記録より

羽越水害の概要

昭和42年8月28日、三陸沖から日本海にのびる前線上に低気圧が発生し前線が異常に活発になり、新潟県北部で強まりはじめた雨は次第に南下し8月30日までに胎内川上流で総雨量が700mmを超えるなど下越地方で記録的な豪雨となりました。

強雨域の南下に伴い荒川、胎内川、加治川、阿賀野川などの河川が増水し堤防が決壊するなど大きな被害が発生しました。豊栄町では総雨量265mmを記録し、加治川、太田川の堤防の決壊により葛塚、木崎、早通地区などを中心に町域の約半分が浸水し孤立する事態となりました。この水害により25ヶ所の避難所に延べ2万3千人が避難し、負傷者7人、総額39億円の被害が発生しました。

各地の雨量

観測場所	総雨量
新 潟	275mm
二王子岳	424mm
赤 谷	412mm
新 発 田	322mm
豊 栄 町	265mm

8.28水害の日誌

8月28日

午前11時15分 新潟地方に大雨洪水注意報発令
午後 4時30分 豊栄町災害対策本部設置
午後 6時30分 新潟地方に大雨洪水警報発令
午後 7時20分 対策本部では町職員全員を非常招集

8月29日

午前 零時30分 加治川右岸向中条堤防決壊
午前 1時 5分 加治川左岸西名柄堤防決壊
午前 1時10分 加治川左岸上内竹地内堤防決壊
午前 2時20分 全消防団員を非常招集し、太田川、新発田川の水防を団守
午後 零時40分 新発田川の左岸通称土場附近溢水
太田川溢水
太田川、新発田川の堤防決壊
午後 1時 笠柳、横井、鳥屋、芋黒に続き、木崎、内島見、下早通、早通、新早通、正尺、城山、松影、下大口に避難命令
午後 1時10分 金清水川の新発田川合流点附近堤防決壊
午後 1時25分 福島潟の増水で内沼沖の堤外地住民に避難命令

8月29日

午後 2時35分 須戸、仏伝に避難命令
午後 4時 新井郷川右岸の葛塚地区全域に避難命令
午後 4時30分 新鼻、新鼻甲、内沼沖、六軒沖の老人、こどもに対して避難命令

8月30日

午前11時30分 豊栄町に災害救助法適用

8月31日

午後 8時 5分 胡桃山の阿賀野川水門開扉
午後11時 太田川堤壊か所の仮復旧補強工事完了

9月1日

午前 1時30分 加治川左岸西名柄堤防決壊か所の締め切り工事完了
午前 3時15分 新発田川決壊か所の仮復旧

9月2日

午後 7時 加治川右岸向中条堤防決壊か所の締め切り工事完了

9月4日

宅地排水は夕刻おおむね完了



8月30日の葛塚駅前通り



8月31日朝の葛塚駅周辺



町でいちばん大きな家屋被害をうけた前新田沖



またもや水にとざされてしまった早通小学校

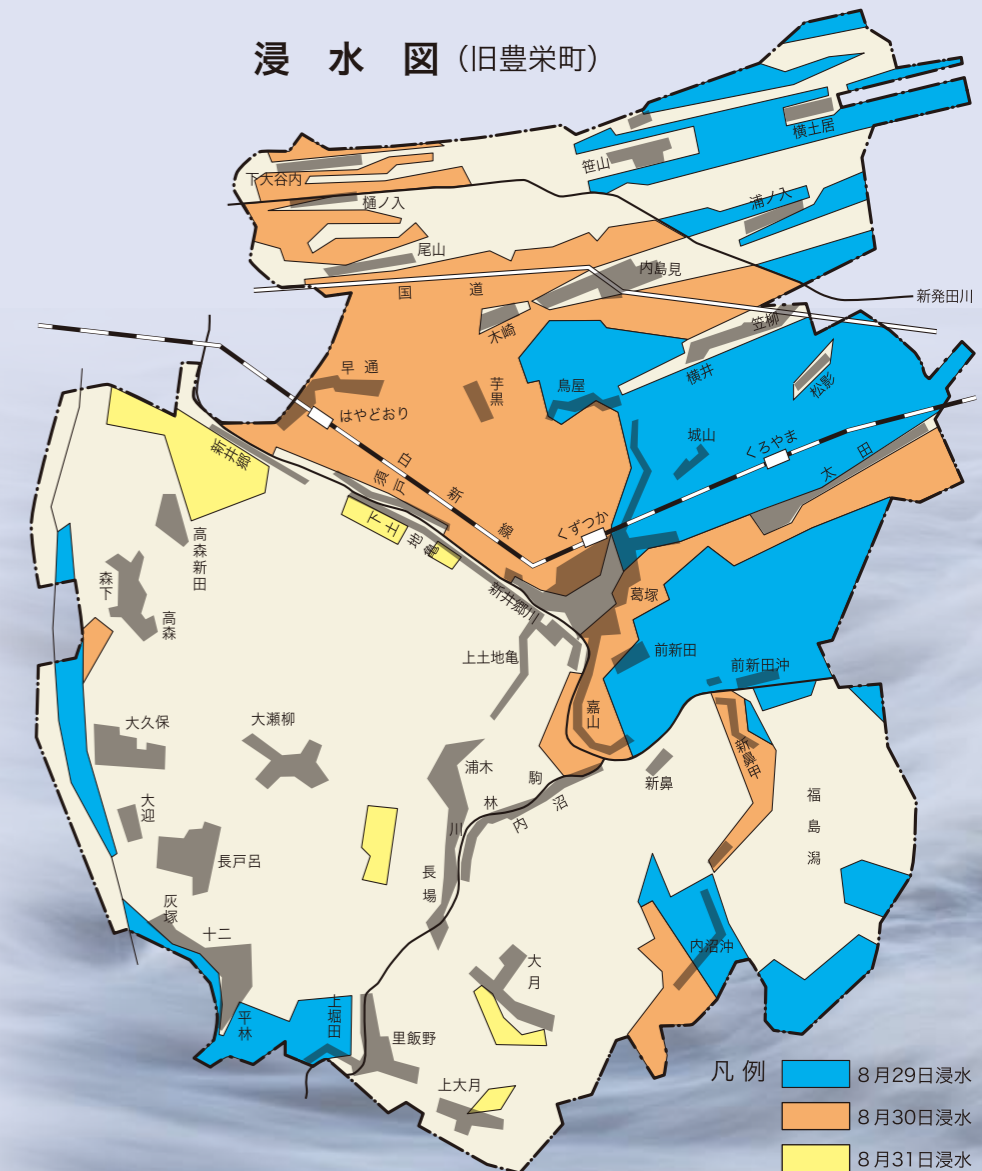


統制のとれた水防活動で兄弟堀周辺は被害を最小限に食い止めた



いち早く、下町十字路から葛塚中学校避難所および対策本部までの仮橋がかけられた

浸水図 (旧豊栄町)



豊栄町の被害状況

被害総額 39億8,561万4千円

人的被害	
重傷	7人
軽傷	2人
住宅	5人
建物被害 4億7,379万円	
全壊	—
半壊	30棟
床上浸水	727棟
床下浸水	901棟
住宅以外	3,023棟

農業被害 25億3,526万2千円	
農地	—
田流埋	1.25%
田冠水	1,998%
畑流埋	0.15%
畑冠水	249%
農業用施設	145ヶ所
農水産物	14億5,145万2千円
商工業被害、土木施設被害など 9億7,656万2千円	



夜を徹して太田川決壊か所の締め切りを急ぐ



北区治水

シンポジウム

～伝える記憶 つながる未来～

日時：平成**29**年**6**月**18**日(日)
午前10時から午前11時30分まで

会場：新潟市北区文化会館ホール
(新潟市北区東栄町1丁目1番5号)

プログラム

- ・羽越水害の記録映像放映
- ・パネルディスカッション
「水害の記憶の伝承」
- ・防災企画展

定員：500名(事前申込：不要)

※当日、満席となった場合は入場をお断りする場合があります。

参加料：無料

会場案内図



お問い合わせ

新潟市北区役所総務課

☎025-387-1115 (平日午前8:30～午後5:30)

主催 新潟市北区役所総務課
協力 新潟市北区防災士の会 葛塚中央防災会

コーディネーター

飯野 晋
新潟市北区長

パネリスト

金城 道夫 さん
元 葛塚中央防災会会長

高橋 恵美子 さん
元 新潟市北区赤十字奉仕団
豊栄地区副分団長

水野 東一 さん
元 豊栄町消防団分団長・本部技術部長

オブザーバー

中川 俊一 さん
新潟県新潟地域振興局 治水課長

鈴木 良子 さん
新潟市北区防災士の会会長



～歴史的大水害から半世紀～

北区下越水害・羽越水害復興記念事業

下越水害とは

昭和41年7月17日、豪雨により加治川を中心とした下越地方の中
小河川が氾濫し大きな被害が発生した水害です。北区周辺でも加治
川、新発田川、新新発田川、太田川、福島淵、新井郷川などが決壊・
溢水しました。また、旧豊栄町全域と濁川地区では地盤の高い市街
地・集落の一部を残して広域的な浸水被害が発生しました。



下越水害(昭和41年)一新鼻甲一

羽越水害とは

昭和42年8月28日、胎内川上流で総雨量が700mmを超えるなど下越地方で記録的な豪雨が
発生した水害です。旧豊栄町では加治川、太田川の破堤により葛塚、木崎、早通地区などを
中心に町域の約半分が浸水し孤立する事態となりました。



羽越水害(昭和42年)一前新田沖一

事業スケジュール

阿賀野川総合水防演習

日時：平成29年5月28日(日) 午前10時～正午
場所：阿賀野川公園(阿賀野川右岸：北区高森地内)

・巡回パネル展：平成29年5月27日(土)～7月10日(月)
北区郷土博物館 会期5/27～7/1 (詳細は下記のとおり)
濁川連絡所 会期7/3～7/10

葛塚中央防災会・北区合同防災訓練

日程：平成29年6月18日(日)

北区治水シンポジウム

日時：平成29年6月18日(日) 午前10時～11時30分(詳細は裏面)

巡回パネル展併催 新潟市北区郷土博物館企画展「北区の水害」

- ・平成29年5月27日(土)～7月1日(土)
- ・会場/新潟市北区郷土博物館 集会室
- ・開館時間/午前9時～午後5時
- ・休館日/月曜日
- ・入館料/無料

水害の記録写真や行政文書のほか、梁取
幹雄氏主宰の図画教室の子どもたちと地域
の人たちが共同制作した「水難絵図」五部
作などから、災害を多角的に紹介します。

新潟市北区郷土博物館 新潟市北区嘉山3452 TEL 025-386-1081

「水難絵図」(五部作)から「夜と小舟」(昭和42年)



■発行／新潟市北区役所総務課

〒950-3393 新潟市北区葛塚3197番地

TEL : 025-387-1000 FAX : 025-387-1020

E-mail:somu.n@city.niigata.lg.jp



羽越水害復興50年記念事業